

日は廿四日なれど、廿三日満山の講畢にして、僧侶も早朝紅粥を影前にて喰ふより事起たるといへり、

紅調粥

〔下學集〕中クワデツユク紅調粥正月十五日赤豆粥也、類說曰、張誠見婦人立宅南、曰、我是地神也、正月半宜作白粥泛膏於其上、祭我、令君蠶桑百倍、今正月半設膏粥、自此始者也。  
〔易林本節用集〕食服クワデツユク紅調粥正月十五日赤豆粥也。

○按ズルニ、十二月八日禪僧ノ食スル粥ヲ、紅糟ト云フ、紅調ハ紅糟ノ訛轉トノ説アリ、紅糟粥ノ條參看スベシ、

智慧粥

〔類聚名物考〕飲食一、智慧粥、ちゑがゆ  
日蓮宗の家にて、法華經全部習得たる時、赤小豆粥を煮て祝ふ、是をちゑ粥といふ、その始をしらす、深草元政法師の草山集に、詩二首并小引に見えたり、  
〔草山集〕十九、和智慧粥詩并引

社中有小兒、曾甫七歲、侍我老親、常觀僧儀而慕之、自不啖葷腥三四年矣、我母愍之、許爲出家、一日來、吾室拜跪曰、我欲出家、願賜出家之名、彼小字曰虎、余卽呼虎哉、彼喜而自名焉、日者習法華已畢、凡我俗終法華全部、日必煮赤豆粥祝之、名曰智慧粥、我母乃設粥以供、社中衆花園東默偶來在席、頌伽陀讚之、余漫嗣其響云、

甘露粥成盈一盃、嘗來便識是醍醐、得千二百舌功德、辛苦醎酸終不殊、

豆粥

〔名物六帖〕飲膳核、豆粥

〔後漢書〕十七、馮異傳、馮異字公孫、潁川父城人也、○中光武自薊東南馳、晨夜草舍、息也、至饒陽蕪蕪亭、註

略、時天寒烈、衆皆飢疲、異上豆粥、明旦光武謂諸將曰、昨得公孫豆粥、飢寒俱解、

粟粥

〔德用食鏡〕粟のかゆ

先粟を洗ひ石なき粟は、洗ひす、石なき粟は、洗ひす、箱にあげ、扱米をざつと洗ひ、相應に水かげんして、焚て吹上る頃粟を